

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
1【いきる】	③【価値ある自分】どのような状況においても、自分の存在を認め、必要とされる存在であることを認識する。 ④【夢や希望の大切さ夢や希望をもつことは、生きる価値を見出すことであり、つらく厳しい状況を乗り越えられることにつながることを実感する。	その他 (PTA行事)
<p>【題材】復興教育にかかわる講演会</p> <p>【対象】二戸市立福岡中学校1学年生徒（172名）と保護者</p> <p>【実践の概要・詳細】</p> <p>1 目的</p> <p>(1) P T A親子行事を通して会員相互の理解と親睦を深め、生徒の健全な育成を図る。</p> <p>(2) 介助犬と触れ合いその役割を知り、身体に障害のある人たちについて理解を深める。</p> <p>(3) 震災の経験を踏まえ、仲間や地域の人々とのつながりを意識させる。</p> <p>(4) ボランティア活動への関心を高め、共生社会参画の素地をつくる。</p> <p>2 期日 平成25年9月28日（土）14時15分～15時15分</p> <p>3 会場 二戸市立福岡中学校体育館</p> <p>4 演題 介助犬交流会「共に生きる～絆・震災・ボランティア」</p> <p>5 講師 中村康夫氏 &amp; ダニー（盛岡市在住）                      岩手難病の会所属、震災ボランティアとして活動を行ってきた方。                      阿部容子氏 &amp; エリック（金ケ崎町在住）                      介助犬ユーザー、自宅を震災ボランティア活動の拠点として提供してきた方。                      山平 誠氏 &amp; ラルー（平泉町在住）                      介助犬とともに陸前高田・大船渡市に行き震災にかかわる調査を行ってきた方。</p> <p>6 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの方の震災当時の様子について紹介いただいた。                          「大震災後犬小屋やドックフードをもって被災地を数回にわたり訪問した。」                          「被災地に行くまでの道も、正直言って通るのが怖かった。」                          「怖いという思いはあったが、自分ができることは何かと考えた時にこれしかないと思って行動に移した。」                          「あまりにひどい状況だったので、こんな小さいことしかできないのは、何の力にもならないのではないかと思うこともあったが、小さなことも自分にできることからやろうという気持ちで被災地に通った。」                          「人（飼い主）も大変だが一緒にペットも同様に大変な思いをして生きている。何かできることからやりたいと思った。」</li> <li>車いすを使うようになった後の介助犬との生活について紹介いただいた。                          「盲導犬、聴導犬、介助犬という補助犬がいる。介助犬はユーザーが落とした物を拾うなど手足が不自由な人の日常生活を助けるために特別に訓練された犬です。」                          （必要なものを手元にもってくる、ドアを開ける・閉める、スイッチを押すなど）                          「介助犬がない生活は考えられないほど、無くてはならない存在になっている。」                          「介助犬は仕事をしてほめられるのが楽しいので何度でも喜んで手伝ってくれる。」</li> </ul>		

## 7 生徒の感想

「介助犬は60の単語を覚えていることを知ってびっくりしました。」

「ユーザーさんによって違う訓練を受けていて無くてはならない存在だと知って、ガムを捨てるなどの介助犬が困ることはしないようにしようと思いました。」

「介助犬が冷蔵庫を開けて水をもってきてくれて、ドアを閉めるまでできるのはすごいと思いました。」

「飼い主と介助犬がつながっているところ、家族になっているところがすごいと思いました。」

「法律に認められていても、入れない店があるなど、なかなか理解してもらえないことがあると聞いて残念に思いました。」

「相手のことを観察しながらいろんなことを乗り越えてこそきずなも深まるものだということがわかりました。」



「僕は困っている人を助ける職業に就きたいと思いました。」

「見守ることも優しさなのだと知りました。特別扱いするのではなく共存できる社会になるといいなあと思いました。」

「私は介助犬トレーナーになりたいと思いました。そのことでみんなが笑顔になれたらうれしいです。」

「介助犬やユーザーさんが住みやすいまちをつくっていきたくと思いました。」

「僕は障害をもった人には優しく接していましたが、相手は嫌だと思うという話を聞いて、これから気を付けていきたくと思いました。」



## 8 まとめ

講師の方々のお話と介助犬との交流は生徒たちにとって自分の行動を振り返って考えるよい機会となった。それは、生徒の感想からだけでなく、その後の生徒たちの様子からも感じることができている。震災を主題に取り上げたPTA講演会は、大きな話題提供にもなっており、家庭で親子と一緒に様々なことを話したり、考えたりする機会になっている。

今回と同様のことをねらいとした企画として、3学年では11月に鳴尾直軌氏（グルージャ盛岡監督）、2学年では2月に松本哲也氏（希望郷いわて文化大使）を講師に依頼しての講演会を予定している。